

令和8年度 本郷中学校  
第1回 入学試験問題

国語

(五〇分 満点…一〇〇点)

注 意

- 一、問題の解答は解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 二、指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
- 三、答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
- 四、字数指定のある問題は、特別の指示がない限り、句読点、記号なども字数に含まれます。
- 五、用具の貸し借りは禁止します。
- 六、指示があるまで席をはなれてはいけません。
- 七、質問があれば、だまって手をあげて監督者を呼びなさい。
- 八、試験が終わったら、解答用紙だけ提出しなさい。問題は持ち帰ってもかまいません。



【二】 次の①～⑤の――線部について、カタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分はその読みをひらがなで答えなさい。なお、答えはていねいに書くこと。

- ① 虫たちの美しい音色がひびきわたる。
- ② 時計が止まったので、デンチを交換した。
- ③ わたしたちは、仲の良いシマイです。
- ④ 部長のホサをする役職に就いた。
- ⑤ 古代の遺跡で巨大なメイキユウが発見された。

【二】次の文章は、永田和宏〔待つことが苦手になった私たち〕（大隅良典 永田和宏『基礎研究者 真理を探究する生き方』所収）の1節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

多くの人は、サイエンスは「学校で習うものだ」という意識を漠然と持っているだろう。学校で習って、それを活用するのは、試験など学校という場においてだけというのが、多くの人々の実感なのかもしれない。

知識としては確かに知っているにもかかわらず、知っていることが日常の場にフィードバックしてこないのが、教科書の知識である。ほとんどの人にとって、教科書で習ったことは本棚に収めておくべき知識で、生活の中で引き出される対象ではないようだ。

たとえば、肌の張りを保つ効果のあるとされるコラーゲンのエピソードは、科学の知識が生活に密着していないことを示している。

摂取したコラーゲンは必ず、肉などのほかのタンパク質と同様に胃や腸でアミノ酸やペプチドという物質に分解されて吸収される。食べ物としてタンパク質を取るのは、身体に必要な新たなタンパク質を合成する材料としてのアミノ酸が必要だからである。すべてのタンパク質は、遺伝情報に従って、アミノ酸を一個一個繋げることによって、合成される。

したがってコラーゲンを飲んだり食べたりしても、摂取したコラーゲンがそのまま肌や骨に含まれるコラーゲンに置き換わることはない。私たちが肌や骨のコラーゲンは、摂取したアミノ酸を使って、一つ一つ自前の細胞で作ります以外にない。

これは中学校でも習う生物学の基礎知識だが、その知識は、日常生活に還元されていないと言わざるを得ないだろう。教科書の知識は理解し、納得しているにもかかわらず、それを自分の生活に落とし込むことができない。巷には、コラーゲンのサプリメントを飲んでお肌を若返らせよう、といった広告があふれている。

サイエンスは本来、日常生活の「なんで？」という疑問から発達してきた世界だ。だからこそサイエンスの知識は、日常生活

の中で確認され、「ああ、そういうことだったんだ」と思い出されるべきなのである。ところが実際は、学校で習った知識は日常生活の中で思い出されることもなく、本棚にしまいこまれたまま眠ってしまっていることの方が多いのではないだろうか。

知識を得るのは、学校だけでなく、いまやインターネットからという場合も多いだろう。言葉の意味だけではなく、複雑な疑問であっても、キーワードをいくつか入れることで瞬時に答えを出してくれる。検索の精度は加速度的に上がっている。

いまの学生たちはインターネットにアクセスすることで、知りたいことの多くを、B 得ているように見える。会話をしながらでも、平気でウィキペディアで検索をしているような学生も多い。一義的にはそれで「知る」ことはできるだろう。しかしそれは果たして「わかった」ことになるのだろうか。

<sup>2</sup> 私は、なにかを知るため、理解するために費やす時間が、その長さが大切だと思っている。知りたいことがあって、すぐにわからなければ、その疑問はずつと頭の片隅に残っている。こびりついている。わからない間、もしかしたらこうではないか、ああではないか、と想像力が働く。これが答えだと思つて確かめるとまた違う。そうすると再び、こうではないか、ああではないか、と想像する……この飽くなきプロセスによつてこそ、想像力が養われていく。

インターネットはすぐに答えを得られるので便利な反面、「なんでかな」「こうではないかな」と思つて疑問を抱え込み、自らそれなりに考えてみるという時間を少なくしている。これでは想像力が働く場がない。

この、すぐに答えが返ってくるという時間感覚は、人々にどんな影響を及ぼすだろうか。

興味というのは、わからないことから湧いてくるものだ。最初からすべてわかつていたら、それは知識の対象にはなるだろうが、興味を持つ対象にはならないだろう。「わからない」部分があるからこそ、「知りたい」という欲求が湧くのである。「わからない」という時間にどれだけ耐えられるか、その耐えている時間こそが、〈知へのリスクペクト（尊敬）を醸成する時間なのである。

どれくらい自分の中で問いや疑問を維持し続けられるか。この「わからない時間」に耐え、しかもそれを楽しむという習慣を、私たちはもっと大切にすべきだし、若い読者はぜひいまから心しておいて欲しいと思う。

知りたいことがあまりに早くわかってしまうと、知りたいと思うこと自体に魅力が感じられなくなる。「知りたい」と思いながら周りの人に訊きいても、誰もが「わからない」と答え、自分は「どうしてだろう」と思い続ける、そういう時間は却かえって心を豊かにしてくれる。

新聞の連載小説のことを思い浮かべる。私は現在、毎日四つの新聞を読んでいるが、そこに連載されている新聞小説もまた、十数年間ずっと欠かさずに読んでいる。なかなかおもしろくてやめられない。

不思議なもので、連載が単行本化されて書籍の形になったものを読むときと、新聞小説の形で読むときとは、まったく違った体験となる。

これもやはり、「知りたい」と思いながら待つ時間の大切さに関係しているだろう。「次はどう展開するんだろう」と期待を持たせて一日分のストーリーを終わらせる。読むこちら側は、展開をあれこれ思いめぐらしながら、翌日の新聞を待つ。そして次の日「やっぱりこうなるのか」と納得したり、「ほう、こう来たか」と意外に思ったりしながら、また続きが気になる……。何がやってくるのを楽しみに待つ時間というのはいいものだ。

私の少年時代は、不思議だと思ったことがあつたとき、どうしてもその疑問を抱えている時間が長くなりがちだった。大人もすぐには教えてくれないし、調べるにも本が少なく、もちろんインターネットもなかった。

せっかく「どうしてだろう？」と疑問を持つても、すぐに答えが見つからないままにそのままにしまったり、そのうちに忘れてしまうものもあつただろう。でも中にはずっと抱え込んだままになっていて、あるとき「そういうことだったのか！」とはっと気づいたりすることもある。

研究者になってからもそういう状態は続いていた。いまの学生たちには想像もつかないかもしれないが、大学の図書館に行けば海外の雑誌がすべて読めるわけではなかった。

生命科学の分野に限っても、月に何百冊も雑誌が刊行されていて、さまざまな論文が載っている。私の時代には、毎週図書館に送られてくる「カレント・コンテンツ (Current Contents)」という小冊子があり、これを頼りに必要な論文を取り寄せていた。

「カレント・コンテンツ」は、論文のタイトル、著者名と著者の住所だけが載っている冊子で、内容については知ることができない。タイトルから内容を想像する以外ない。おもしろそうだと思ったら、その著者のもとに別刷り請求<sup>注3</sup>というはがきを送って別刷りを送ってもらうのである。自分の論文が出ると、どのくらいの数の別刷り請求が来るかは、大きな楽しみだった。論文の注目度をはかる目安でもあっただろうか。

はがきは海外でもおそらく1週間ほどで届き、その返事として、希望の論文が船便で送られてくる。1か月ほど、ときには2か月もかかって論文を入手することがあった。その間、「あの論文にはどういうことが書かれているのだろう」などと想像したり予想したりしながら待つ。そして、海を渡ってようやく手元に届いた論文を読む。

中には届く頃には興味が失せてしまい読まない論文もあった。いまからみれば非効率以外の何物でもないだろう。ところがその非効率的な時間が、「知りたい」という欲求を育てる、興味や好奇心を膨らませる大切な役割を果たしていたのだと思う。

自分が取り組んでいる研究に関係した論文を「カレント・コンテンツ」のタイトルの中から探していくなかで、タイトルを順番に読みながら、自分の研究とは直接関係がないのだが、「なんだかおもしろそうだな」という論文に出会うことがある。

「C」のようなものである。とはいえ、これは歩いていないとぶつからない。

いまは格段に効率が良くなり、自分の欲しい論文はすぐ手に入る。インターネットでキーワード検索すれば「B」出て、ダウンロードもすぐにできる。便利だが、逆にキーワードに関係しない情報はほとんど入ってこないシステムだ。

これは、私たちが普段読んでいる本についてもいえる。たとえばAmazon<sup>注4</sup>は便利で、私も時々使ってしまうが、私の息子は「あれは本屋を潰す<sup>つぶす</sup>」と言って、Amazonを使わず必ず本屋に行っている。たしかに本屋に行くと、背表紙を眺めているだけで思いがけない本があることに気づき、予定になくても買ってしまいうことがあるが、ネット書店ではそういうことはほとんど起きない。

是枝裕和<sup>これえだろかず</sup>さんはいまやもつともよく知られた映画監督だが、彼は昔、私のエッセイ集『もうすぐ夏至だ』（白水社）を本屋で見つけて、装幀<sup>そうざん</sup>とタイトルに魅<sup>ひ</sup>かれて買ってくれたそう。それまで私のことをまったく知らなかったが、いわゆる「ジャケ買い<sup>注5</sup>」だったのだという。ところが買って読んだらおもしろかったということで、新聞やテレビで紹介してくれた。それをきっかけに、

彼との交友が始まった。

特に求めている情報にも接することで、思いがけない機会が与えられることがある。こうした機会が、科学者の世界でも一般社会においても失われようとしている。

物事をシステマティックにし、無駄を排して、効率化を極限まで進めているのが現代の社会だ。そんないまだからこそ改めて、目的に一直線に行かず、周囲を見まわしたり、寄り道をするることによる思いがけない出会いにも目を向けて欲しい。

特にAIが発達したからか、インターネットの検索サイトでは、こちらの興味のある情報やニュース、あるいは新刊本の紹介などを、過去の履歴から類推して、どんどん送りつけてくるようになった。こちら興味のある情報が多いわけで、ついそれに引き込まれもするのだが、この頃は、私の過去に出版した著書の紹介まで送られてくるようになり、初めは苦笑いしていたのだが、これは実は怖いことではないかと少しずつ思うようになってきた。

私たちが、自ら探したいと思っている情報が、実は操作されている可能性があるのかもしれないということが一つ。

いまはもちろん過去の履歴などからの情報の提供ではあるうが、そんな形での情報だろうと思つて、それらを重宝していたら、いつの間にか、情報提供者の操作する情報にどっぷりはまってしまうつていて、こちらの興味そのものが操作されていたなんて、SFまがいのことも決してあり得ないことではないだろう。自分でそれに気づいていないところがいちばん怖い。いわゆる「言論統制」といったかつての恐怖とある意味では隣り合わせの世界でもあろう。

それほど悪質でなくとも、もう一つ注意すべきは、自分の興味を付度そんたくして、優先的に送られてくる情報にばかり接することによって、自分の世界がどんどん閉じていく危険性である。一つの世界にとことん詳しくなることも大切ではあるが、一つの世界だけに閉じこもってしまう危険性に注意深くあることもまた大切である。

私たちのようなサイエンスに関わっている人間は、自分の研究の対象だけにしか興味を示さない研究者も多い。誰も、自分の研究対象がいちばんおもしろいと思つているから研究を続けられるのであるが、研究では、どんなに優秀な研究者であっても、必ず行き詰まりというものを経験する。行き詰まったときに、どのようにその状況を打開して、袋小路から抜け出せるかは、複

眼的な世界の見方を常に維持していること以外に方法がないのである。

※問題作成の都合上、文章中の小見出し等を省略したり、書体を変更したりしたところがあります。

注1 ウィキペディア……世界中の誰もが作成・加筆・訂正できるインターネット上の百科事典。

注2 プロセス……過程。

注3 別刷り……学術雑誌などに掲載された特定の論文だけを別に印刷したもの。

注4 Amazon……アメリカに本拠地を置く世界最大級のオンライン小売業者のサイト。

注5 ジャケ買い……CDや本などを内容を知らないまま見た目にひかれて購入すること。「ジャケット買い」の略。

注6 システマティック……一定の秩序や規則に従って整然と組織された状態。

注7 SF……科学的な空想に基づいた作り話。「サイエンス・フィクション」の略。

問一

A、B にあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。  
ただし、同じ記号には同じ言葉が入ります。

- ア 確実に                    イ 即座に                    ウ 手軽に                    エ 入念に                    オ 如実に                    カ 豊富に

問二

C にあてはまることわざを答えなさい。

問三

——線1「巷には、カラーゲンのサプリメントを飲んでお肌を若返らせよう、といった広告があふれている」とありますが、筆者はこれらの広告が世の中にあふれていることからどのようなことを示そうとしていますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 摂取したカラーゲンはそのまま肌や骨の中に含まれるカラーゲンに置き換わらないという科学的な知識が、多くの人々に知られていない現状に対して、科学者として危機感を抱いているということ。  
イ せっかくな学校で科学の知識を学んでも多くの人々は日常生活に活かすことができないので、科学的に間違っているても企業は商品を多く買ってもらうために人目を引く広告を作ってしまうということ。  
ウ 科学は日常生活における疑問から発達した学問であり、その知識は日常生活で活かされてこそ意味があるため、学校の理科の授業はもっと日常生活にからだんだ内容や実験を多く行うべきだということ。  
エ 多くの人々は広告にうたわれている内容に特段の不信感を抱いておらず、学校で習ったはずの科学的な知識が本来活用されるべき日常生活において思い出されたり活用されたりしていないということ。

問四

——線2「私は、なにかを知るため、理解するために費やす時間が、その長さが大切だと思っている」とありますが、筆者は「なにかを知るため、理解するために費やす時間」によって、何が育はぐまれると考えていますか。問題文中よりそれぞれ漢字三字で二つ抜き出し、答えなさい。

問五

——線3「たとえばAmazonは便利で、私も時々使ってしまう」とありますが、ここから筆者はAmazonを利用して本を購入することについて消極的だと考えられます。筆者がそのように考える理由について述べた次の一文の空らんにあてはまる部分を問題文中より四十一文字で抜き出し、最初と最後の三字を答えなさい。

(四十一文字)

が大切だと考えているから。

問六

——線4「初めは苦笑いしていた」とありますが、筆者はどのようなことに「苦笑い」したと考えられますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 検索履歴から自分にとって興味のある情報が送られてくることにありがたみを感じていたが、そもそも遠回りが大切だと思っている自分がいつの間にかその便利さに慣れてしまっていたということ。

イ インターネットの検索サイトから送られてきたおすすり情報の中に自分が過去に出版した著書が出てきたことから、今まですさまじい進歩を遂げてきたAIにもいよいよ限界がやってきたということ。

ウ AIの進歩によつて検索履歴からその人に興味があると思われる情報を送れるようになったが、その情報の提示は受け取り手について考慮されることなく機械的に行われているにすぎないということ。

エ 自分の著書が著作者の自分にまで推薦されるようになったということは、自分の著書が数多くの人々に検索されたことを示しており、今後はより著書の内容を充実させる必要があるということ。

問七

——線5「これは実は怖いことではないかと少しずつ思うようになってきた」とありますが、筆者はどのようなことについて「怖い」と感じていますか。五十五字以上七十字以内で説明しなさい。

【三】 次の文章は、伊予原新の小説『宙わたる教室』の一節です。東新宿高校定時制（夜間の高校で様々な事情を抱えた生徒も通っている）理科の教員である藤竹は顧問を務める科学部の学会での研究発表を目指していますが、なかなかうまくいきません。このような状況の中で藤竹は科学部の部員であるアンジェラ、佳純、長嶺、岳人に科学部を作った理由を語ろうとします。以下はそれに続く場面です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

「では、始めさせてもらいましょう」藤竹は教壇に立ち、全員の顔を見回した。「最初に、私は皆さんに謝らなければなりません」「え、何を？」アンジェラが目を見開く。

「私の身勝手な企てをです。申しわけありません。私がこの学校に科学部を作ったのは、皆さんのためではありませんでした。私のためです」

岳人が訝しむような視線をこちらに向けた。佳純も驚いて顔を上げる。

「さつきから何を言っとるんだ、あんたは」長嶺が眉をひそめて言った。

「長嶺さんのように波瀾万丈の人生ではありませんが、私が経験した話を少しだけ聞いてください」

長嶺にうなずきかけ、教卓に軽く両手をつく。何から話すかは決めていた。

「皆さんの想像どおりかもしれませんが、私は比較的裕福な家庭で育ちました。小学生の頃は恐竜少年でしてね。家族旅行でどこへ行きたいか両親に訊かれると、決まって恐竜の化石や標本で有名な博物館のある場所をリクエストする。そんな子どもでした」

生まれ育ったのは、世田谷の静かな住宅街。四年生のときから塾に通い、中高一貫の進学校に入った。父親は大手ゼネコンの研究所に勤めていたが、五年前に定年を迎え、今は母親と二人、山梨に居を移して念願の田舎暮らしを満喫している。

「両親が、よく言ってくれたんです。あなたほど恐竜に詳しい子はいない。いつかきっと、誰も見たことのない化石を発見するような立派な博士になれる。私はすっかりその気になりました」

「でも、恐竜の博士にはならなかったのネ」アンジェラが微笑む。

「恐竜が絶滅した原因が、隕石の衝突だという説を知っていますね？」

「ああ、聞いたことあるヨ」

「そのことを知って、天体衝突に興味を持ったんです。惑星そのものも、微惑星や原始惑星同士の衝突と破壊を通じて形成される。地球の大気や海も、太古の地球に大量に降り注いだ小天体が生み出した。そんな話を中学生の頃に本で読んで、感銘を受けてましてね。で、だんだんと興味がそちらへ」

大学は理学部の地球惑星科学科に進んだ。入学時から研究者を志していたが、小学校の教師をしていたことがある母親の勧めもあって、高校の教員免許だけは取っておいた。それがまさかこんな形で役立つ日が来るとは、当時は想像もしていなかったが。

その後、大学院で博士課程を修了し、二十七歳で博士号を得た。そして同じ春、とある地方の国立大学に助教として採用される。一番下っ端の大学教員だ。五年の任期付きポスト<sup>注2</sup>ではあったが、若手研究者としては順調に歩んでいたといつていい。

<sup>1</sup> そんな話<sup>a</sup>に、四人は神妙な面持ちでただじっと聞き入っている。

「助教として赴任した大学——仮にM大としますが、そこでの上司にあたる教授は、太陽系の惑星探査が専門でした。とくに、探査機に赤外線カメラを搭載して天体を撮像<sup>注3</sup>する研究で知られた人です。最近よく、サーモグラフィで体温を測るでしょう？」

「カメラの前に立つたら、画面が赤くなったり青くなったりする、あれか」長嶺が言った。

「ええ。あれと同じような原理で、天体表面の温度分布や大気の動きを調べるわけです。うちの研究室では当時、新しいタイプの中間赤外カメラの開発に取り組んでいました。その共同研究者に、同じ県内の高専の准教授<sup>しゅん</sup>がいましたね。わかりますか、高等専門学校」

「中学を出てから入る、技術系の学校だろう」また長嶺が答える。「確か、五年制だったか」

「そうです」と応じて続ける。「私がM大に来て二年目の春、その高専の学生でK君という人と知り合いました」

高等専門学校には研究機関としての側面があり、教授や准教授は研究室を持っている。学生も、最終学年の五年生になると卒

業研究を課される場合が多い。共同研究者である准教授のもとで、Kは他の二人の学生とともに、卒業研究として中間赤外カメラの開発を一部担っていた。

M大の研究室にもよく出入りしていたKは、決して勘がいいとも器用だともいえなかったが、とにかく熱意にあふれていた。自分が関わった観測装置がいずれ宇宙で活躍するという感動に衝き動かされていたのだろう。任されたレンズ系の試験に寝食を忘れて励み、ひたすら地道に正確なデータを出し続けた。

カメラの開発には直接携わっていなかった藤竹ともすぐ親しくなった。高専の学生の中には、卒業後、大学に三年次編入する者が一定数いる。KもM大への編入を目指していて、将来は研究者になりたいという夢も熱く語ってくれた。

カメラは完成に近づき、その性能を論文にまとめることになった。Kは藤竹の部屋へやってきて、「論文、僕の名前も載りますよね」と嬉しそうに言った。客観的に見て、彼の貢献は開発メンバーの中でも相当大きなものだったので、「当然載るよ」と答えた。

しかし、筆頭著者であるM大の教授が書いた論文の草稿を見て、啞然とした。十人の名前が並ぶ著者の中に、Kは入っていないのだ。彼が出したデータの表やグラフが大きく扱われていたにもかかわらず、である。

「私は教授に猛抗議しました。K君のデータがなければカメラは完成に至らなかった。彼はメンバーの誰より長い時間実験室にこもって仕事をした。それをまるでなかったことのようにするのは許されない不正だ、と訴えたんです。すると教授は、耳を疑うようなことを言いました。『大学院生ならともかく、高専の学生の名前など入れたら、論文の格が下がるだろうが』」

「ひどいネ」アンジェラが漏らした。岳人も唇を結び、険しい目をこちらに向けている。

「私は、高専の准教授にも考えを質しました。彼はあきらめ顔で首を振って、M大の教授には逆らえないと言いました。毎年自分の学生が何人かM大に編入する。編入試験に合格させるためには、教授の後押しが必要だから、と。そして最後に付け足したんです。『藤竹さん、あんまりKをその気にさせないでください』」

Kは学業の成績も芳しくなく、指示されたことを愚直にやることしか取り柄はない。研究者になりたいと言っているが、とて

もそんな能力はない。論文に名前が載って、彼がますますその気になっては、本人のためにならないだろう。高専の准教授はそういう言っただのだ。

「それは私にとって、一種のカルチャーショックでした。その気にさせてはいけないという理屈が、どうしても理解できなかった」

「私なんかには、わからん話でもないがね」長嶺が渋い顔で言う。

「それで、K君はどうなったの？」アンジェラが訊いた。

「自分の頑張りが完全に無視されて、研究の世界に失望したんでしょう。結局、M大の編入試験を受けることもなく、学校が幹旋せました会社に就職しました」

長嶺が深く息をついた横で、アンジェラが「かわいそうネ」とつぶやく。

「私もまた、失望しました。それ以来、教授との関係は悪化の一途をたどりましてね。私のポストは一回まで任期の延長ができる規定だったのですが、教授から、延長させるつもりはないとはっきり申し渡されました。私も教授のもとにはいたくありませんでしたし、任期を二年残したまま退職して、アメリカへ渡ったんです」

「なんでアメリカ？」アンジェラが言った。

「日本とは違う空気を吸ってみたかったことが一つ。向こうにいる友人のアメリカ人研究者に誘われたことが一つです。アリゾナへ行きました」

アリゾナ大学は、アメリカにおける惑星科学研究の拠点の一つだ。大学附属の月惑星研究所という機関に、二年契約のポスト注5ク研究員として赴おもむいた。

「大学のあるツーソンという街は、砂漠に囲まれたところでしてね。空気が日本と大違いどころか、乾燥しているわほこりっばいわで、最初は参りました。とにかくそこで研究生活をリスタート注6させて半年ほど経った頃、また一人の学生と出会ったんです。ロビンという、ナバホ族の十八歳の若者でした」

「ナバホ族？」アンジェラが聞き返す。

「アメリカ先住民の部族です。アリゾナにはナバホの大きな居留地注7があるんですよ」

ある日藤竹が、同じフロアにある友人の研究者のオフィスを訪ねたときのことだ。部屋に入ると友人は、ガラクタにしか見えない珍妙な装置を前に、貧相な体つきの若者と熱心に議論していた。くたびれたTシャツにバンドの壊れたサンダルといういでたちで、経済的に余裕がないことは明らかだ。ナバホ族の居留地に家族と暮らしているというロビンは、奨学金を得てアリゾナ大学に通い始めた一年生だった。

ガラクタ装置はロビンが作ったもので、太陽エネルギーを利用して部屋を暖めたり、湯を沸かしたりすることができるという。車の古いラジエーター注8のまわりに黒く塗った空き缶を何十個も取り付け、それを木箱に入れてプレキシガラスのふたをしてある。すべて廃品でできたシンプルな装置だが、アイデアは思わずうなってしまうほど素晴らしかった。

「ロビンは高校生のときにその装置を作り上げ、州の中高生科学フェアに出品して最優秀賞を獲ったとのことでした」

「へえ、すごい天才少年ネ」アンジェラが感心して言う。

「それが、そういうわけではないんですよ。彼はもともと勉強が嫌いで、科学にも興味なんてなかった。その暖房装置は、家族のために作ったんです」

母子家庭であるロビンの一家は、居留地に住む多くのナバホ族と同様、貧困にあえいでいた。自宅のトレーラーハウスは天井も壁も隙間すきまだらけで、氷点下になる真冬も家にただ一つしかない石炭ストーブで寒さをしのぐという状態だったらしい。

そんな家に比べて、走る車の中のほうがずっと暖かいことに気づいたロビンは、それがエンジンとラジエーターのおかげだと知る。エンジンの代わりに太陽エネルギーを利用し、ラジエーターと組み合わせれば、暖房器具ができるのではないか。彼は廃車の山を漁りあさ、ごみ捨て場を歩き回って部品を集め、試行錯誤の末にそれを完成させたのだった。

「そのことを知った彼の高校の教師が、科学フェアへの出品を勧めたそうです。その教師は、賞を獲ったあともロビンを鼓舞し続け、その気にさせた。そして、以前の彼なら考えもしなかったはずの大学進学を実現させたんです」

さつきまでだらしなく脚を投げ出していた岳人は、両手を机の上で組み、身じろぎもせず話を聞いている。長嶺は軽く目を閉じ、何か考え込んでいるようだった。

「それだけではありません。私の友人がオフィスでロビンと話し合っていたのは、共同研究のことでした。友人は月面に有人基地を建設するプロジェクトに関わっていて、月の寒い夜を乗り切るための蓄熱技術を研究していました。たまたまロビンの装置のことを聞きつけ、月面での蓄熱に応用できないかと考えたんです。実際、友人がロビンを私に紹介してくれたときの第一声は、『彼はロビン。俺たちの同僚だよ』でした」

教壇を下り、机の間をぬってゆつくり歩き始める。

3 「M大で経験したこととの落差に、私は愕然がくぜんとしました。同時に、目の前の二人がたまらなくうらやましくなっただけです。まだ何者でもないナバホの若者を同僚と呼び、彼に教えを請うている友人が。まわりの大人たちのおかげでその気になって、科学の道を歩み始めたロビンが。何より、そんな環境が当たり前にあることが、ただ純粹にうらやましかった」

すっかり冷え切った夜十時前の教室に、自分の声だけが響く。

「同じようなことは、日本では起きないのだろうか。この国ではいつまでも、科学はエリートと優等生だけのものなのだろうか。科学とは無縁に生きてきた人々から研究のインスピレーションを得るなど、無理な話なのだろうか。いったんそんなことを考え始めると、検証せずにはいられない。私の性分です。まずは実験として、優等生ではない高校生を集め、何か研究活動をやらせてみたいと考えました」

再び教壇に戻り、四人に向かって言う。

「その舞台に選んだのが、東新宿高校定時制です。この学校に科学部を作り、何が起きるかを観察する。そのために皆さんを利用したといわれても仕方がない。これはあなたたちのための活動ではなく、私のための実験だったんです」

藤竹が語るのをやめても、誰も口を開かなかつた。岳人はじつとこちらをにらみつけている。腕組みをした長嶺は目を閉じたままだ。アンジェラは口を半開きにして、他の三人の様子をうかがっていた。

束の間の沈黙のあと、息を潜めるように座っていた佳純が、小さく右手を上げた。

「どうぞ、名取さん」

「あの……」佳純は震える声で言う。「もし……もしこの科学部が、先生の実験なんだとしたら……。先生の仮説は何ですか？」

「何か仮説を検証したくて、実験したんじゃないんですか」

訴えるように問う佳純に、小さくうなずきかけた。ずっと胸の奥にあった形のないものを、初めて言葉に変換する。

「どんな人間も、その気にさえなれば、必ず何かを生み出せる。それが私の仮説です」

佳純は瞳を潤ませて、「だったら——」と言った。

「<sup>4</sup>だったらそんなの、実験じゃないです。観察する相手のことを信じてやる実験なんて、ないです」  
言葉を失った。

何も返せないまま、いつの間にか強張っていた肩の力が抜けていく。安堵と感嘆、そしてかすかな羞恥しゆうちが混ざり合った不思議な感覚に、自然と口角が上がる。

「まったく」眼鏡に手をやり、小さく息をついた。「あなたの言うとおりかもしれません」

後ろで椅子ががたと鳴った。岳人が立ち上がっている。

「この科学部が、あんたの実験かどうかはどうでもいい」

感情の爆発を必死で抑えようとしているような声だった。それがかえって、強い意志を感じさせる。<sup>5</sup>岳人は三人の部員たちを見回してから、こちらを真つすぐ見据すえた。

「俺はただ、俺たちの実験を続けたい。俺たちの装置を使って、<sup>注10</sup>クレーターを作りた。それだけだ」

注1 ゼネコン……大規模な建築を発注者から請け負い、建築完成までやりとげる企業。

- 注2 ポスト……地位、身分。
- 注3 撮像する……撮影するとほぼ同じ意味。
- 注4 斡旋した……紹介した。
- 注5 ポスドク研究員……大学院を修了し博士号を取得した後に、就くことができる研究員。
- 注6 リスタート……再開。
- 注7 居留地……ここでは先住民の居住や営業などの自由が優先的に認められた地域のこと。
- 注8 ラジエーター……熱くなったエンジンを冷却する装置。その際にこの装置自体は熱を持つ。
- 注9 トレーラーハウス……車で移動できる、車輪がついている住まい。
- 注10 クレーター……科学的には火山の口や隕石などが地表に衝突した時にできる円形のくぼみを指すが、ここでは部員たちがそのくぼみに似たものを作ろうとしている。

問一 〃線 a 〃 c の語句について、それぞれの問題文中における意味として最も適当なものを次のア 〃 エの中から一つ選  
び、記号で答えなさい。

a 神妙な面持ちで

ア いつもより真剣な顔つきで

イ おごそかな雰囲気緊張した顔つきで

ウ 興味をかき立てられたような表情で

エ 驚きながらも期待を持った表情で

b 寝食を忘れて

ア 大事な用事をほったらかして

イ 正気を失ったように

ウ 結果を気にしないで

エ 一つのこと熱中して

c 愚直にやる

ア 苦手なことでも真面目にやる

イ 言われた通りに繰り返し返してやる

ウ 自分勝手に解釈してやる

エ 不器用ながらただひたむきにやる

問二 ――線1「そんな話」とありますが、この内容を説明したものととして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、

記号で答えなさい。

ア 進学校に入った藤竹が、順調に大学の理学部へ進学し、入学時から研究者を目指していたのに、自分が望んだ大学教員になれなかったこと。

イ 恐竜少年だった藤竹が、小学校の教員であった母に勧められて、大学教員をめざすようになり、ある地方の国立大学の教員になったこと。

ウ 恐竜に興味を持っていた藤竹が、恐竜の絶滅した原因を知り、関心が天体に移り、大学で研究を続けた結果、研究者として歩み出せたこと。

エ 裕福な生い立ちの藤竹が、両親の経済的支援によって自分の関心のままに恐竜や天体衝突などの研究を続け、念願の研究者になったこと。

問三 — 線2 「私もまた、失望しました」とありますが、Kの進路を見届けた藤竹はどのようなことに失望したのですか。

その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一途にデータを集め研究に没頭するKの研究者としての能力をねたんで、研究者としての道を閉ざした高専の准教授の度量の小ささ。

イ 研究への貢献度よりも世間体を保つことを優先したり、大学との利害関係から学生の熱意を受け止めなかったりする日本の研究界の実態。

ウ Kの研究成果に関する正当な抗議をしただけなのに、個人的な恨みから自分のポストの任期の延長をこぼんだ大  
学教授の品位にかける人間性。

エ 研究にも学業にも秀でたKが、高専の学生であるというだけで、研究者をあきらめて就職するしかないような日本  
本の行き過ぎた学歴社会。

問四 — 線3 「M大で経験したこととの落差」とありますが、藤竹はアメリカで教員が学生にどのように関わっているのを見聞きしましたか。四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問五 — 線4 「言葉を失った」とありますが、このときの藤竹を説明したものとして最も適当なものを次のア～エの中から

一つ選び、記号で答えなさい。

ア 実験が藤竹の仮説を実証するために科学部の部員を利用した身勝手なものだったことを佳純から涙ながらに指摘され、部員の気持ちを軽んじてきたことを申し訳なく思っている。

イ 藤竹は無自覚なままに部員たちの才能をあてにして実験をしていたが、佳純の批判によってそれが客観性を欠いていて科学的手法とは言えないことに気づき、たじろいでいる。

ウ 藤竹自身は意識していなかったが、部員たちに科学の研究ができると元から期待しながら関わってきたことに佳純の発言によって気づかされ、強い衝撃を受けている。

エ 部員たちが藤竹からの信頼を肌で感じながら何かを生み出そうとしていたことを佳純との会話から知らされ、仮説はすでに実証されていたと思ひ、大きな喜びにひたっている。

問六 ――線5「岳人は三人の部員たちを見回してから、こちらを真つすぐ見据えた」とありますが、このときの岳人の説明

として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちが観察対象にされたことにいきどおり、藤竹の助けなしに自分たちだけで実験を成功させて、藤竹を見返してやろうと思っている。

イ 言葉の上では藤竹に反発しているものの、心の中では藤竹の思いを受け止めており、自分たちの実験を成功させてみせると意気込んでいる。

ウ 藤竹の仮説のために利用されていたことにはがっかりしたが、同じように利用された部員たちと一緒に、実験を成功させようと気持ちを切り替えている。

エ 藤竹の期待を知って内心ではうれしく思うものの、実験は藤竹のためではなく自分たちのために行うものだと照れ隠しのために宣言して、気を引きしめている。

問題はこのページで終了です。





